ランケとニーブーア

―近代歴史学の成立過程―

佐　藤　真　一

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　若きランケとニーブーアの『ローマ史』
Ⅲ　南方研究旅行中のニーブーア宛 3 書簡
Ⅳ　ベルリン大学講義における「ニーブーアとヘーゲル」
Ⅴ　ランケの「ローマ史講義」におけるニーブーア
Ⅵ　おわりに

Ⅰ　はじめに

近代歴史学は 19 世紀前半，ドイツの学者によって確立された．「批判的歴史研究の開拓者」といわれるニーブーア（Barthold Georg Niebuhr 1776-1831）と「近代歴史学の父」と呼ばれるランケ（Leopold von Ranke1795-1886）がその中心的な推進者であった．ほぼ 20 歳の年齢の開きがある両者はどういう関係にあったのだろうか．彼らはそれぞれ近代歴史学の確立にあたってどのような位置を占めていたのだろうか．たがいの学問をどう評価していたのであろうか．とりわけランケはニーブーアの歴史研究をどのように捉えていたのであろうか．本稿では，ランケのライプツィヒの学生時代，フランクフルト・アン・デア・オーダーの教職時代，ベルリン大学教授時代の各時期を展望しつつ，回顧，書簡，講義録，諸著作を手がかりにこの点を考察する．

Ⅱ　若きランケとニーブーアの『ローマ史』

> 私の古代研究はニーブーアの『ローマ史』によって多大な刺激を受けた．この書物は私に印象を与えた最初のドイツ語の歴史書であった．そのなかに，私の思いもよらなかったことがいかに多く見出されることであろう！[1)]

注 1)　L.v.Ranke, Diktat vom Oktober 1863, in: Zur eigenen Lebensgeschichte（Ranke, *Sammtliche Werke*（以下 *SW* と略記する），Bd.53/54, Leipzig 1890, S.31.『ランケ自伝』林健太郎訳，岩波文庫，1967 年，45 － 46 頁，参照．なお，以下の訳文は訳書と異なるところがあるが，訳書から示唆を受けている．

ランケは，1863 年 10 月にこう語った．ザクセン選帝侯国の小都市ヴィーヘに生まれ，名門ギムナジウム，シュールプフォルタに学んだランケがライプツィヒの学生時代（1815 － 17）に専門としたのは，歴史学ではなく神学と古典文献学であった[2]．入学早々受講した歴史学の講義は，彼に歴史にたいする関心を引き起こさせるどころか，その煩瑣な内容によって歴史を疎遠にさせるものとなった．

その彼に強い印象を与えたのがツキディデスの『戦史』であり，ニーブーアの『ローマ史』であった．1885 年 12 月にもランケは学生時代を回顧して語っている．

> そのあと私の歴史研究に最大の影響を与えたのはニーブーアの『ローマ史』であった．リヴィウスやディオニュシオスに即して繰り返された言及，多くの箇所で真に古典的精神の息吹を放っているニーブーア自身の叙述は，近代にも歴史家が存在しうるという確信を私に起こさせた[3]．

ニーブーアは，ヴォルフ（Friedrich August Wolf 1759-1824）が古典文献学の分野で築いた批判的方法を歴史に初めて適用した最初の歴史家であった[4]．共和政初期のローマ史研究にあたって，ニーブーアが考察の主要な手がかりとしたのが，久しく権威とされてきたリヴィウス（Titus Livius BC.59--AD.17）とハリカルナッソスのディオニュシオス（Dionysios von Halikarnassos BC.80/75—AD.7 以後）の史書であった．ニーブーアによれば，リヴィウスは古い伝承に無批判であり，それを切りつめたり，想像に基づいて創作を付け加えたりした．ディオニュシオスはより慎重ではあるが，彼においてもあらゆる根拠を欠いた空想に基づいた主観性が見られる．こうして彼らは初期ローマ史の伝承の欠如や乏しさを、事実の裏づけのない想像で埋め合わせようとした[5]．

ニーブーアは指摘する．「批判的歴史家，あるいは判断を下す歴史家としての修辞家ディオニュシオスを語ることは無益である。見識のある権威としてのリヴィウスを私はすでに首尾一貫しない把握と矛盾のゆえに非難して然るべきであろう[6]」．

ランケは、ライプツィヒ時代には，まだ歴史家となる決意を固めるには至らなかったが，後の歴史家ランケを考える際に，ニーブーアのこの『ローマ史』に深い感銘を受けていたことは注目に値する．

1818 年の秋，ランケはフランクフルト・アン・デア・オーダーのギムナジウムに上級教員として着

---

2) ランケの生涯と学問の概略については，佐藤真一『ヨーロッパ史学史』知泉書館，2009 年，221 － 240 頁，参照．

3) Ranke, Diktat vom Dezember 1885, in: A.a.O., S.59,『ランケ自伝』81 頁，参照．

4) Seppo Rytkönen, *Barthold Georg Niebuhr als Politiker und Historiker. Zeitgeschehen und Zeitgeist in den geschichtlichen Betrachtungen von B.G.Niebuhr*, Helsinki 1968, S.191, S.194 f. ニーブーアはヴォルフを「ドイツ文献学の英雄にして父祖」と評し深く尊敬していた（H.R.v.Srbik, *Geist und Geschichte vom deutschen Humanismus bis zur Gegenwart*, Bd.II., München 1964, S.197.）．ランケは 90 歳の誕生日の祝賀会に出席してくれたボン大学の学長と評議員にたいし感謝を述べ，「若き日に私の行く手を照らしてくれたわれわれの巨匠であるフリードリヒ・アウグスト・ヴォルフ，そしてとりわけ深く尊敬するニーブーアの思い出は，われわれを深く感動させてくれました」と記している（Ranke an Rektor und Senat der Universität Bonn vom 27. Dezember 1885, in: Ranke, *Neue Briefe*, Hamburg 1949, S.737.）．

5) Rytkönen, a.a.O., S.186.

6) Niebuhr, *Römische Geschichte*, Teil II, Berlin 1812, S.V.

任する．古典語と歴史の専門教員としてであった．ランケは授業の準備にあたって一般書を避け，ひたすらギリシア，ローマの歴史家の著作を体系的に精読する．このことが，歴史研究を生涯の仕事とする決断を促すことになった．1819 年にはローマ史の講義を開始する．その際リヴィウスやタキトゥスその他の原典ばかりでなく，ニーブーアの『ローマ史』が大いに役立った．

一方 1821 年以降，授業準備と並行してランケ自身の研究も進められてゆく．フランクフルトでの最初の 2 年間は授業準備のため，古代史と古代文学史に専念していたが，やがて中世の歴史家の考察へと進む．とりわけ，ルイ 11 世とシャルル 8 世時代にかんするコミーヌ（Philippe de Commynes 1447-1511）の『回想録』が刺激となり，最初の書物の着想を得ることになった．その際，当時広く読まれたウォルター・スコット（Walter Scott 1771-1832）の歴史小説『クウェンティン・ダーワード』に見られる虚構を避け，あくまで厳密に事実に即した考察をめざす．ここには，ニーブーアから学んだ批判精神が生きている．

こうした研究の成果が 1824 年末に，最初の書物として結実する．1494 年から 1514 年までのヨーロッパを考察した『ロマン・ゲルマン諸民族の歴史』およびその付録『近世歴史家批判』である [7]．とくに後者において示された，近世の歴史家たちによる史料批判が不徹底であるという指摘は，ニーブーアが古代の歴史家に対しておこなった批判を近世の歴史家にたいしてなしたものであった [8]．

この両著をランケは丁重な書簡を添えてニーブーアに送付する．1824 年 12 月 14 日の日付をもつ書簡の冒頭で，ランケは記している．

> 閣下の祖国へのご帰還に際して私の尊敬の念を捧げるために，ここに二冊の著作を送付させていただきます．これらは，近世史の初期にかんして同時に出版したばかりのものでございます [9]．

ニーブーアは創立されたばかりのベルリン大学で 1810 年 11 月から 1812 年 3 月まで，ローマ史の講義をおこなったが，それが記念碑的な著作『ローマ史』（1811/12）として出版された．その後ニーブーアは，1816 年から 1823 年までヴァティカンにおけるプロイセン公使の任務についた．プロイセンにおけるカトリック司教区の再編成について協議し政教条約を結ぶためである [10]．彼は 1823 年 4 月に帰国したが，翌年にプロイセンの枢密顧問官に任命された．ニーブーアは顕職に就くことを願っていたが，叶わず，学問に専心することを決意して，1825 年春，ボン大学に着任する [11]．

---

7) 佐藤真一「ランケにおける近代歴史学の成立――『近世歴史家批判』（1824 年）を中心に――」，『国立音楽大学研究紀要』第 40 集，2006 年，1 － 12 頁，参照．

8) 晩年の大著『世界史』においてランケは，近世史と古代史における批判的研究の相違について触れ，「近世史においては真正でないものを排除することであり，古代史においては真正なものを際立たせ，それを時折埋められた竪穴から明るみにだすこと」と述べている（Ranke, *Weltgeschichte*, III/ 2, Leipzig 1883, S.X.）．

9) Leopold Ranke an Barthold Georg Niebuhr vom 14. Dezember 1824, in: Ranke, *Gesamtausgabe des Briefwechsels von Leopold von Ranke*（以下，*GB* と略記する）Bd.1: 1810-1825, bearbeitet von Dietmar Grypa, Berlin/Boston 2016, S.692.

10) Ranke, *Aus dem Briefwechsel Friedrich Wilhelms IV. mit Bunsen*, Leipzig 1873, S.3 f.

11) Rytkönen, a.a.O., S.283.

ニーブーアの帰国からだいぶ時がたってはいたが，この機会に敬意を表しつつ，ランケは彼の最初の書物をニーブーアに献呈したのである．

つづいてランケはこの書簡で、ニーブーアの『ローマ史』がこれまでの自身の歩みの中で占める重要な意義に触れる．

> 閣下ご自身の『ローマ史』は，私が真に精読した最初のドイツ語の歴史書のひとつです．すでに大学時代に御著書から抜粋をし，何とかして学びとろうと努めました．御著書は，6 年半にわたる教職において繰り返されたローマ史講義にあたって，大いに役立ちました [12]．

ランケが『ローマ史』に沈潜したのは史料の批判的吟味に基づく著者の歴史研究に魅了されたからであったことは，この書簡でニーブーアを「古代史の新しい批判の創始者 [13]」とみなしていることからも明らかである．

ランケはこうした敬意や感謝とともに，ここに一つの切実な願いをも書き添えている．

> たっての願いというのは当面の試みの継続にかかわるものであります．すなわち研究の継続は当地の状況ではほとんど不可能であります。そればかりか、たとえ大図書館に近いという幾分恵まれた環境にいたとしても，必要とする史料のすべてを手にしうるわけではないということです．お贈りする書物の第一部では，私は印刷された日誌，公使報告書，回想録を見出し，それらは私にもっとも重要な点でかなり明確に情報を与えてくれました. 第二部に関しても確かに史料は存在します。しかし、未公刊のものなのです [14]．

そのような中で，ランケは当時出版されたばかりのペルツ（Georg Heinrich Pertz 1795-1876）の『イタリア旅行』(1824) [15] の一節に目をとめ, 研究をさらに進めてゆく際の貴重な指針を見出したのである．ランケはこの書簡で, ペルツがこの書物の 9 頁で次のように書いていると述べている [16]．「ローマのアルティエーリ侯図書館には，ここ 3 世紀のローマからの，またローマへの通達，報告，書簡の非常に豊かなコレクションが所蔵されている」．ペルツ自身は幾分詳細に次のように記している．

> 枢密顧問官ニーブーアの仲介により，市参事会員アルティエーリのご好意によって，私は彼の図書館の手稿目録の閲覧を許された．私はそこに…ここ 3 世紀のローマからの, またローマへの通達,

---

12) Ranke an Niebuhr vom 14.Dezember 1824, in: *GB*, Bd.1, S.692.
13) A.a.O., S.694.
14) A.a.O., S.693.
15) Georg Heinrich Pertz, *Italiänische Reise vom November 1821 bis August 1823*（Aus dem 5ten Band des *Archivs für ältere deutsche Geschichte* besonders abgedruckt, S.1-514），Hannover 1824.
16) Ranke an Niebuhr vom 14. Dezember 1824, in: *GB*, 1.Bd., S.693 f.

報告，書簡の非常に豊かなコレクションを見出した．それらのなかに，確かにかつての政治のいくつもの秘められた筋道が発見された．カルディナリー・パドローニ研究所が一段と興味深い公文書をまちがいなくヴァティカンやサンタンジェロの代わりに，ローマの大家族の文書館に配置しなければならなかったので，専心それらの文書に数年費やすなら、誰にとってもこの時代の研究はローマでこそ非常にやりがいのあるものとなるであろう[17]．

ランケは最初の書物までは，ほとんどすべて刊行された近世の歴史書を批判的に検討することによって研究を進めてきた[18]．しかし今や，これ以後の研究を進めていくには，印刷されていない原史料に基づくことがぜひとも必要であると意識するようになった．まさにその時期に，ランケはペルツの『イタリア旅行』を読み，学生時代以来『ローマ史』を通じて深い尊敬の念を抱いていたほかならぬニーブーアの仲介によって，ペルツがアルティエーリ家の図書館で原史料を閲覧することを許されたことを知ったのである．

アルティエーリ（Marco Antonio Altieri 1760 − 1834）はローマ貴族の家系の出であり，教皇庁と密接に結びついていた．この貴族の家系は他の貴族家系と同様に，教皇庁の公文書の大コレクションを所有していた．

ランケは今後の研究の進展のため，ニーブーアの助力を切望していた．

これらの文書を閲覧するという切なる願いをいだいて援助と助言を求めることが許されるのは，閣下を措いてほかにどなたがいるというのでしょうか．閣下こそ，古代史の新しい批判の創始者，ローマにおけるすべてのドイツ人，プロテスタントの代表者であり，またそう表現することが許されるなら，実際われわれの真の保護者なのですから．16 世紀の歴史全体は全般的な批判的修正を必要としています．そしてその修正はわれわれの助けとなる史料がなければまったく不可能であります．尊き閣下, 自らそれを探し出しうることまで国家から援助を受けようとはあえて望みません．しかし，それらがプロイセン国家やあなたのお名前の庇護をうけて，当地まで送り届けられることは可能ではないでしょうか[19]．

こうして最初の二著に添えて，ランケからきわめて丁重な感謝と懇願を書きとめた書簡がニーブーアに送られたことによって，両者のつながりが生じた．両者は結局のところ面識の間柄にはならなかったが，それでもこれ以後ニーブーアが亡くなるまで 6 年余りにわたってこのつながりは続くのである．

---

17) Pertz, a.a.O., S.9.

18) 『ロマン・ゲルマン諸民族の歴史』では，フランクフルト・アン・デア・オーダーのギムナジウムのヴェスターマン文庫に所蔵されていたサヴォナローラの 3 つの説教の写本に言及されている．これは例外であったと言えるであろう（Ranke, *Geschichten der romanischen und germanischen Völker von 1494 bis 1535*, Bd.1. Leipzig und Berlin 1824, S.107 Anm.）．

19) Ranke an Niebuhr vom 14. Dezember 1824, in: Ranke, *GB*, Bd.1. S.694.

ところでランケは，ニーブーアの批判的歴史研究の根底にある思想潮流にも目を向けている．回顧して次のように語る。

> しかしながら旧体制の復活がその後ひきつづき優位を占めたことは，思想，生活，そして学問の上にもきわめて大きな影響を与えた．歴史の研究は本来ナポレオン的理念の独占支配にたいする反抗から発展したものである．ニーブーアの『ローマ史』が学問の世界の内外に引き起こした大きな影響はこの基礎の上に立つものであった．普遍的支配に対立する特殊な生活，一つの大きな国家発展の内的諸条件が学術書においても一般的な対抗心を引き起こした．オストフリート・ミュラーの研究はこの同じ基礎から生じてきたものである．シュテッフェンスがブレスラウでおこなった講義は，ミュラーに少なからぬ影響を与え続けた．深遠な学識が多かれ少なかれ政治的動向と結びついた．対立は哲学や神学によって調停されることはなく，より深く活気づけられた．人々はあらゆる方面に向かう活発な運動の渦中にいた．ベルリンの若き教授として私はそうした運動のただ中に暮らし，まだ欠けているとみなした学問的意図をもって近世史の研究にとりかかった．この研究は私をヴィーンに，ついでイタリアへと導いていった[20]．

Ⅲ　南方研究旅行中のニーブーア宛 3 書簡

さて，ランケの最初の著作は高く評価され，翌年（1825 年）春にはベルリン大学に招聘されることになった．1871 年にまで及ぶ輝かしい研究活動の場を与えられたランケにとって，とりわけベルリンの王立図書館所蔵のヴェネツィア公使の報告書類は，今後の研究にとって重要な基礎となるものであった．これ以後，ランケの歴史研究は原史料に基づく研究へと向かっていく[21]．その成果はすでに 1827 年に，『16，17 世紀における南ヨーロッパの諸君主・諸民族』として公にされた．副題には「主として印刷されていない公使の報告書による」と記されている．ランケによれば，ベルリン王立図書館は 2 つ折判 48 巻のヴェネツィア報告書を所蔵しており，そのうち 46 巻は「政治情報」という表題が付けられている．そこには入省する高級官吏のための指示と訓戒，教皇選挙会議についての報告，書簡，演説，様々な考察とメモなどが含まれていた[22]．

しかしこうした研究をさらに深めるためには，さらに一歩進めなければならなかった．ランケは語っている．

---

20)　Ranke, Diktat vom Dezember 1875, in: *SW* 53/54, S.47 f.『ランケ自伝』67 頁，参照.

21)　1824 年 12 月 28 日付のランケのプロイセン文部省に宛てた申請書の中で，ランケは『ロマン・ゲルマン諸民族の歴史』の第 2 部を執筆するためには，これまでのような印刷された史料ばかりではなく，印刷されていない原史料の閲覧がぜひとも必要であることを記している（Ranke an das Ministerium der Geistlichen, Medizinal- und Unterrichts-Angelegenheiten vom 28. Dezember 1824, in: Ranke, *GB*, Bd.1, S.708-713.）.

22)　Ranke, *Fürsten und Völker von Südeuropa im sechszehnten und siebzehnten Jahrhundert. Vornehmlich aus ungedruckten Gesandtschaftsberichten*, Bd.1., Hamburg 1827, S.XIII.

しかし今や私はここにとどまっていることはできなかった．なぜなら，ベルリンの収集は膨大なものではあるが，イタリアの図書館や文書館が提供するに違いない史料に比べれば，取るに足りないことが容易にわかったからである．私はこの宝を発掘するためにみずから出掛けていくのに必要な支援を得ることができた．その際私がまずヴィーンに目を向け，事実行くことにしたのは，ヴェネツィア文書のかなりの部分が占領された結果ヴィーンに運ばれており，実際この地の文書館に所蔵されていたからである[23]．

すでに最初のニーブーア宛の書簡に示されていた切実な願いが叶い，1827年秋以降3年半にわたって，実地にヴィーン，そしてヴェネツィア，ローマその他イタリア諸都市の図書館，文書館を訪問し，限定的であったとはいえ史料を閲覧できるようになる．ヴィーンではプロイセン文部省の局長カンプツの推薦状に基づき，ゲンツやメッテルニヒの助力によって，文書館への道が開かれた．ローマのアルティエーリ侯図書館に所蔵されているコレクションもニーブーアの推薦状によって閲覧が可能となった．長期にわたる南方研究旅行の最大の成果である『ローマ教皇史』（1834 － 6）には，アルティエーリ図書館の6つの原史料が紹介されている[24]．

さて，ランケは研究旅行中さらに3通の書簡（1828年と29年）を[25]ニーブーアに宛てて書いている．1828年10月5日付の書簡[26]の冒頭で，ランケは記している．

ブルーメ教授が当地（ヴェネツィア）の司書ベッティオ氏に宛てた紹介状としてヴィーンにおりました私に送付してくださった書簡のなかで，あなたのご委託を受けてできるかぎり早く，こちらにあるドゥカス（Ducas）の翻訳の書き写しの可否にかんする情報を得たいという願いを述べておられます[27]．

ニーブーアはビザンツの歴史書の編纂者としても知られる．こうした史料集として，すでに17世紀には『ビザンツ史書集成』のパリ版が，18世紀にはヴェネツィア版がギリシア語テキストにラテン語訳を添えた版として刊行されていた[28]．そして今や『ローマ史』によって近代の歴史的批判的研究を開拓したニーブーアが，ボン版[29]を準備していたのである．

---

23) Ranke, Diktat vom November 1885, in:*SW* 53/54, S.63. 『ランケ自伝』86 － 87頁，参照.

24) Ranke, *Die römischen Päpste, ihre Kirche und ihr Staat im sechszehnten und siebzehnten Jahrhundert*, Bd.3, Berlin 1836, S.228 f., S.306, S.327 f., S.328-332, S.333 f., S.334-336.

25) これまで（1989年まで）公刊されていなかった3通の，ランケのニーブーア宛の書簡が，フィッシャーの論稿（Eduard Vischer, Niebuhr und Ranke, in: *Schweizerische Zeitschrift für Geschichte*, Bd.39, 1989, S.243-265.）において公にされた（S.261-265）.

26) Ranke an Niebuhr vom 5. Oktober 1828, in: Vischer, a.a.O., S.261 f.

27) A.a.O., S.261.

28) Vischer, a.a.O., S.255.

29) *Corpus scriptorum historiae Byzantinae*, 48 Bde. Bonn 1829-55. ニーブーアの死後は，ベルリンの科学アカデミー

ところで, ニーブーアがビザンツの歴史家たちに関心をいだくようになったのはいつ頃であったのか. プロイセン公使として彼は 1816 年にヴァティカンに赴任したが，そのイタリア滞在期以前に遡るのか. それは明らかではない．しかしローマ着任当初から，法史学者ザヴィニ（Friedrich Carl von Savigny 1779-1861）のために [30] ローマ法の史料を探すばかりでなく，ビザンツ史家の史料にも注意を向けていたのである．当然ドゥカスの名は彼の知るところであったはずである．1341 年から 1462 年までのビザンツ史を叙述した 15 世紀の歴史家ドゥカスの『歴史』は，すでに 1649 年のパリ版に，ブリアルドゥス（Ismael Bullialdus）の序文を付して収録されていた [31].

ニーブーアはすでに 1816 年に面識の間柄になったヴェネツィアのサン・マルコ図書館の司書モレッリ（Jacopo Morelli）[32] から，ドゥカスの史書の近代語（イタリア語）版の存在を知らされ，細心の注意を払ってではなかったが, すばやく目を通したと推定されている [33]. さらにニーブーアは 1820 年には『ビザンツ史書集成』のパリ版を購入しようとしていたという証言がある [34]．1823 年にローマから帰国しボン大学で教鞭をとることになったニーブーアはさしあたりパリ版の校訂をめざすが，今やドゥカスのビザンツ史のイタリア語版を精査する必要をつよく感じとっていたのであった.

一方，ランケの書簡で名前を挙げられているブルーメ（Friedrich Bluhme 1797-1874）はどういう人物であったのか．彼はベルリンで博士の学位を取得（1820 年）した後，イタリア旅行をし，ローマ法に関する写本のリストを作成し，その他の点でも徹底して様々な図書館を探し回り，ローマでは一時期ニーブーアと同じ家に住んでいた．彼はすでに数年来ハレの法学の員外教授であった [35]．その彼がヴェネツィアのサン・マルコ図書館のモレッリの後任司書であったベッティオ（Pietro Bettio）[36] に手紙をしたため，ドゥカスのビザンツ史のイタリア語版の写しをニーブーアに代わってランケに依頼したのであった．ランケのニーブーア宛書簡には，背景にこうした経緯があったのである.

ランケは 1828 年 9 月 27 日にヴィーンからヴェネツィアへ到着し, この依頼に直ちに応えようとした. 写字生も雇われた．さらに手紙はつづく.

によって継続された（Ranke, *Vorlesungseinleitungen. Aus Werk und Nachlass*, Bd.IV, hrsg. von Volker Dotterweich und Walter Peter Fuchs, München/Wien 1975, S.361 Anm.）.

30) ニーブーアとザヴィニは，創設されたばかりのベルリン大学でともに講義を開始した同僚である．1810 年の秋に二人は知り合い, 1810 ／ 11 年の冬学期のニーブーアのローマ史の講義をザヴィニは聴いている．ザヴィニはその際「ニーブーアはローマの歴史叙述にとって新しい時期を始めるはずだ」と語ったという．ザヴィニはニーブーアの歴史的思考の発展に決定的な影響を与えた（Rytkönen, *a.a.O.*, S.173 f., S.209, S.210 Anm., S.211）．ニーブーアは，『ローマ史』の第 1 巻の序言で，ザヴィニへの謝辞を述べている（B.G.Niebuhr, *Römische Geschichte*, Erster Theil, Berlin 1811, S.XIV.）．親しく交流し示唆を与えあったザヴィニの史料収集をニーブーアは援助したのである.

31) 「ドゥカスは最後のビザンツ史家の一人であった．彼はアダムから始まる小さな世界年代記を書いたが，その主要関心はほぼ 1360 年から 1460 年までの年月に向けられている．したがってビザンツ帝国の没落を含んでいる」（Vischer, a.a.O., S.262 Anm.）.

32) モレッリは 1778 年から 1819 年の彼の死までサン・マルコ図書館の司書であった（Ranke, *Neue Briefe*, S.140 Anm.）.

33) Vischer, a.a.O., S.255 Anm., S.256. フィッシャーは，ニーブーアこそこのドゥカスの史書のイタリア語版を目にしたアルプス以北の最初の人物だったと推定している（A.a.O., S.256）.

34) A.a.O., S.255 f.

35) A.a.O., S.262 Anm.

36) A.a.O., S.255 Anm.

写本は 133 Bl.fol. です．一青年が彼の書き写しの試し書きを同封して送付いたします．書き写しは 2 ヶ月から 3 ヶ月で仕上げられることでしょう．ベッティオの確認の後，約 12 グルデンお支払いいただくことになります．私が書き写されるべき箇所を選びました．と申しますのも，その箇所が冒頭部分以上に，イタリア語版テキストとギリシア語版テキストとの関係を明らかにするからであります．

なぜなら，これは明らかに本来の翻訳とはかけ離れたものだからです．同封のメモにおいて，ギリシア語テキストのイタリア語テキストにたいする本来の関係はいかなるものか，あるいはもっと正確にいうとイタリア語テキストはギリシア語テキストにたいしていかなる関係にあるのかを示そうと試みました．歴史的な諸目的のためには確かにこの注目すべき記念物を活字にすることは望ましいことでしょう．しかし，文献学的にはどうでしょう．すべてをご自身で判断なさるのが最善でしょう．

この機会にあなたに私の敬意をあらためて表したいと存じます．イタリアで，私がお役に立つことがございましたら，何なりと――私に向いていない文献学的校合を除いて――おっしゃっていただければ幸いです．

当地におそらくなお 1 ヶ月とどまるつもりです．それからフィレンツェとローマに出掛けます[37]．

1829 年 2 月初めにランケはヴェネツィアをたち，フィレンツェにしばらく滞在し，3 月末にローマに到着した[38]．4 月 10 日に彼はふたたびニーブーアに宛てて書簡をしたためている[39]．その冒頭でランケは，ニーブーアが求めているドゥカスのイタリア語版テキストの筆写が進められていることにたいする前年 11 月のニーブーアの感謝状を喜び，さらにその書き写しが若干の訓練をつんだ一人の青年によって図書館員の監督と修正のもとに進められていること，省略されているところはそのままにしておくよう指示したこと，その仕事は厳しい寒さのために幾分遅れが出ていたが，ランケがヴェネツィアをたったときにはかなり進捗していたこと，間もなく完了し，薄い紙にびっしり書かれたそのノートは郵便馬車でボンに運ばれる予定であることを報告している[40]．そして記す．

ヴェネツィアの文書館が最近数世紀のビザンツ史に対して，なお並外れて重要な文書を所蔵して

37) A.a.O., S.261 f.　フィッシャーは，このイタリア語版テキストに関して次のように注釈をつけている．「それは事実，本来の翻訳ではなく，この主題の独立した別の版である．二つの版が同じ言葉で始まっているという事情が，『イタリア語版』が単純に翻訳であるという性急な推定に導いたのかもしれない」（ A.a.O., S.262 Anm.）．1828 年 10 月 5 日付の書簡によると，ランケはギリシア語版とイタリア語版のこうした違いにすでに気づいていた．

38) E.Guglia, *Leopold von Rankes Leben und Werke*, Leipzig 1893, S.117 f.

39) Ranke an Niebuhr vom 10. April 1829, in: Vischer, a.a.O., S.262 f.

40) A.a.O., S.263.

いることは疑う余地がありません．文書館利用の許可を確約してもらいましたが，まだそれは実現してはいません[41]．

文書館は当時なお原則的に，諸国家の秘密分野に属し，君主ないし君主の意向を体した大臣の特別な恩顧によってのみ利用することができた[42]．

許可は確かに部分的であるにすぎませんが，それによって私にとってはつねに，少なくとも文献の面で様々な情報を，そして私自身が主として捜し求めているもの以外にかんしても提供してくれることでしょう．いずれにせよ，年代記は――第一級の報告を含むそれらの多数がヴェネツィアに存在します――とくに重要です．それらを利用するにはしかし，時間と才能と勤勉が必要とされます．さしあたり，皇帝アレクシウスによって十字軍の間に公布された文書――それは一種の封建制をクレタに導入します――以外は何も提供されませんでした．これはコルフに原本があり，ムストヒディス（Mustoxidi）氏がその写しを所有しています．それはしかしもう一度校閲したあとにはじめて役立ちうるでしょう．彼はそれを校閲し，お届けしようと申し出ております．それは当然ギリシア語で書かれています．

一言申し添えますと，私の研究は順調に進んでおります．図書館は豊富です．人々は親切です．フィレンツェではメディチ家文書館も訪ねなければなりません．制限つきではありますが閲覧許可を得ておりますし，その許可はもっと多く役立ってくれることでしょう．とはいえ，分量は途方もなく多く，事柄はしばしば見通しがききません．お役に立っておりますならば、私にとりましては願ってもないことでございます．尊敬の念をもってあなたを想いおこしているのですから[43]．

それから 7 ヶ月あまりしてから，同じくローマからランケはニーブーアに宛ててもう一通の書簡（1829 年 11 月 25 日付）[44] を送っている．冒頭でランケは記す．

あなたがまだ実際に校合の作成に同意しておられないにもかかわらず，プロコピオス原本との校合を遠慮なく同封して送付させていただきます[45]．

ランケは 1828 年 10 月 5 日付の書簡の末尾で，自分には適していない文献学的校合についてはお力にはなれないと告げていた．それにもかかわらず，ローマにおいて閲覧できたプロコピオス（Procopius

41）A.a.O., S.263.
42）A.a.O., S.263 Anm.
43）A.a.O., S.263. なお，ムストヒディス（Mustoxidi 1785-1860）は学識のある文学者で，後のギリシアの大臣である（Vischer, a.a.O., S.263 Anm.）．
44）Ranke an Niebuhr vom 25. November 1829, in: Vischer, a.a.O., S.264.
45）A.a.O., S.264.

490 年頃―565 頃）の様々な相違する写本をニーブーアのために収集していた．当時ローマのもっとも重要な私設図書館であったバルベリーニ図書館にプロコピオスのアウクスブルク版が所蔵されていたことを，この手紙でニーブーアに伝えている．アウクスブルク版は 16 世紀初頭の最も古い版であった[46]．

> このアウクスブルク版の欄外には，Cod. Vat.152 の異文がホルステニウス（Holstenius 1596-1661）によって加筆されています．ホルステニウスが司書を勤め，彼による写本が多く保存されている当地で，なにが彼の手になるものかをよく知ることができます[47]．

この手紙の後半にも原本と異本とについての立ち入ったランケの考察はつづくが，近代歴史学草創期の原史料探索の一端が示されている．

ランケは 1830 年の末に弟のフェルディナントに書き送っている．

> 後期ギリシア精神を示すいくつかの未完文書をその間ローマで見つけ、そのことについてニーブーアに報告をしました。ニーブーアのためにここで（ヴェネツィアで）イタリア語版のドゥカスの写しを，ローマでプロコピオスのテキストの校合を送付しました[48]．

ランケにとって気がかりであったのは，ヴェネツィアからすでに送られたはずのドゥカスのテキストの写しがボンに無事に届いたかどうかであった[49]．実際にはドゥカスの史書のイタリア語訳の写しは疑いなくボンに届いていた．イマヌエル・ベッカー（Immanuel Bekker）は 1834 年，ドゥカスの『歴史』をボン版の一冊として刊行した．その際，ランケの尽力でボンに送られ，さらにベッカーの住むベルリンに転送された[50] ドゥカスの史書のイタリア語版もともに刊行されたのである[51]．しかし，ランケに感謝を述べるべきであったニーブーアの受領通知は書かれなかった．ニーブーアの晩年はあまりに多忙であった，とニーブーア書簡集の編集者は記している[52]．

なお、1829 年 11 月 25 付の手紙の末尾でランケは，『ヴィーン文学年報』に公になったばかりの歴史

---

46) ランケの晩年の大著『世界史』の第 4 巻 1 部と 2 部の叙述には，しばしば典拠としてプロコピオスの史書が引用され，また「プロコピオス」論に 1 章が設けられている（Ranke, *Weltgeschichte*, Teil 4, Abt. 2. Leipzig 1883, S.285-312）．プロコピオスはヘロドトスを模範とし，ポリュビオスの立場に近く，ツキディデスと張り合っている，とする（A.a.O., S.286 f., S.298）．

47) Ranke an Niebuhr vom 25. November 1829, in: Vischer, a.a.O., S.264 .

48) Ranke an Ferdinand Ranke vom 16. Dezember 1830, in: Ranke, *Neue Briefe*, S.141.

49) Ranke an Niebuhr vom 25. November 1829, in: Vischer, a.a.O., S.264.

50) Vischer, a.a.O., S.260.

51) ただしこの史料集のニーブーアの編纂協力者であったイマヌエル・ベッカーの良心的でない仕事ぶりにより，この史料集の学問的価値は高くないという．Vgl. Vischer, S.259 f.

52) A.a.O., S.265 Anm. 1829 年の晩夏と初秋，ニーブーアは疲れきっていた．その後ふたたび本格的な仕事に取りかかったものの，1830 年 1 月には自宅が火災にあい，その弁済に大きな負担を負い，また七月革命に動揺し，さらに『ローマ史』1・2 巻の第 2 版を完成させ印刷の監督をしなければならなかった，という（Vischer, a.a.O., S.258）．

的批判的論文「ドン・カルロス」の抜き刷りを同封させていただくのでお受け取りいただきたい，と記している[53]．

さて，ニーブーアの求めに応じて，ランケによって史料にかかわる援助がなされていたその時期に，ニーブーアがランケの南方研究旅行中に執筆した新著『セルビア革命史』（1829 年 1 月刊）を賞賛していたことにも注目したい．1829 年 7 月 21 日付の出版者ペルテス宛の手紙でニーブーアは次のように記した．

> ランケのセルビア革命の書物，まことにおめでとうございます．声を大にして本書を推奨します．…この小著は歴史書として，われわれの文献の中でもっとも卓越したものであると断言できます[54]．

このことはペルテスを通じてランケに伝えられ，ランケは弟ハインリヒへの手紙でそのことをほのめかしている[55]．ランケは大いに励まされたことであろう．ニーブーアはまたボン大学の講義で，ランケを「現代のツキディデス」と宣言した．その理由は，「自分の時代の出来事を叙述のために選び，彼の課題を見事に解決したからであった[56]」．

こうしたニーブーアの賞賛の言葉はながく影響を及ぼし，南方研究旅行の後ランケの名声は大いに高まり、ランケの講義は至るところから聴講者をベルリンに引き寄せることになった[57]．

Ⅳ　ベルリン大学講義における「ニーブーアとヘーゲル」

3 年半に及ぶヴィーンとイタリア諸都市での研究旅行を終えてドイツに帰ってきたとき，ミュンヒェンでランケを待っていたのは，ニーブーアの死去の知らせであった．1831 年 2 月 3 日，ランケはベルリンの親しい同僚ハインリヒ・リッターに宛てて書いている．

> ドイツの地に帰ってきた私を迎えたのは，きわめて痛ましい知らせでした．私がミュンヒェンで手にした最初の新聞は一面でニーブーアの死を伝えていました．志を同じくするわれわれのこの偉大な人物が亡くなることで，穏健な人々，勤勉な人々，善良な人々はすばらしい支えを失いまし

53) Ranke an Niebuhr vom 25. November 1829, in: Vischer, a.a.O., S.264. ランケが同封した論文は，Zur Geschichte des Don Carlos, in: *Jahrbücher der Literatur*, Bd.46, Wien, April, Mai, Juni 1829, S.227-266. である。

54) Ranke, *Das Briefwerk*. Eingeleitet und herausgegeben von Walther Peter Fuchs, Hamburg 1949, S.204 f. Anm. ニーブーアは続けて記す．「ランケはかつて文体面で不快感を与えていたものをすべて捨て去りました」（A.a.O.）．ランケの最初の書物に見られた文体の鈍重さに不快感を抱いていたことが見て取れる．

55) Ranke an Heinrich Ranke vom 15. November 1829, in: *SW* 53/54, S.228.

56) Theodor Wiedemann, Leopold v. Ranke und Varnhagen v. Ense nach der Heimkehr Rankes aus Italien, in: *Deutsche Revue*, 26. Jg, Aug. 1901, S.218.

57) A.a.O., S.218.

た[58]．

その 2 日後，ペルテスに宛てて書いている．

ニーブーアとアルニムについての知らせにはどんなに深いショックを受けたかを分かっていただけることでしょう．ミュンヒェンに到着してすぐそのことを知らされました．それらの人々，とりわけニーブーアを失ったことは，われわれにとってこの上ない不幸な出来事です[59]．

ニーブーアは 1831 年 1 月 2 日に，アルニム（Achim von Arnim 1781-1831）は 1 月 21 日に亡くなった．

ランケの喪失感の背後には，ニーブーアの足跡の大きさについての感慨が表れている．ボン大学哲学部宛の書簡で，ランケは語る．

古代歴史学研究の偉大な巨匠であるバルトルト・ゲオルク・ニーブーアがローマから帰り，政務に携わることをやめたとき，彼はボンに居を定め，講義を通じてボン大学の歴史研究を開始したといえます．講義は，生き生きとした見解とつねに機知に富み，測り知れない，同時によく考え抜かれた学識において比類なく，のちに教養世界の共有財産となりました．彼の後も歴史諸学は，ボン大学の哲学部で立派に威信を保っています[60]．

さて，ベルリンに帰還後，ランケは講義を再開する．その中で、ニーブーアに言及しながら、独自の歴史把握が示されていることが注目を引く。1839 ／ 40 年の冬学期，「18 世紀半ば以降の現代史」と題する講義の冒頭で，ランケは語った．

普遍史の学問的技法において，主として二つの異なる取り扱い方法が相互に対立している．すなわち古事学的（antiquarische）方法と哲学的方法である．古事学的方法は個別的なものの考察から出発し，外面的なものに即して進展し，時期，場所，相次いで起こること，一般に事実を確定しようとする．時折それは単なる収集にすぎない．しかしそれが不確かな場合には勇敢な精神は満足することはできず，才知ゆたかに，偉大な精神力を要する研究へと移っていく．このような古事学的方法，より正確には探究する方法の模範として，われわれはニーブーアを挙げることができる．ニーブーアは卓越した理解力，抜群の記憶力，際立って純粋な道徳感情によって，このことにきわめて有能であった．

58) Ranke an Heinrich Ritter vom 3. Februar 1831, in: *SW* 53/54, S.245.
59) Ranke an Friedrich Perthes vom 5. Februar 1831, in: *Briefwerk*, S.230.
60) Ranke an die Philosophische Fakultät der Universität Bonn vom 27. Februar 1867, in: Ranke, *Neue Briefe*, S.484 f.

前世紀（18 世紀）の意味ではなく，フィヒテやヘーゲルの意味での第二の哲学的方法は，理性が世界を支配しているが，目的は世界を解放することであるということから出発する．哲学的方法にとって重要なのは，つねにこの抽象的な関連を具体的なものに即して実証することである．世界精神はこうしてまったく必然的な経過によって進み――その点で世界精神は個体を犠牲にする――世界精神は熱狂的に個体の個別的な目的を攻撃する[61]．

このように述べる時，ランケは確実にヘーゲルの歴史哲学講義を念頭においている．

ヘーゲルは 1822 ／ 23 年の冬学期にベルリン大学で歴史哲学の講義をおこない，これ以後 4 回，歴史哲学講義を繰り返した．この講義は 1837 年にはじめて著作集の第 9 巻（ガンス編）として出版された．さらに 1840 年に大哲学者の息子カールによって第 2 版が公にされた．この『歴史哲学』講義のなかで，ヘーゲルは「哲学的な歴史」をとりあげ，「歴史の哲学は思考によって考察することにほかならない[62]」と述べる．

哲学にそなわっている唯一の思想は，理性が世界を支配し，それゆえ世界史においても事態が理性的に進行する，という理性の単純な思想である．この確信と洞察は，歴史それ自体を考慮するならば一つの前提であるが，哲学においては前提ではない．哲学の思弁的認識によって証明されるのは，理性――この表現をここでは神と関係づけて詳しく述べることなくそのままにしておいてもよい――が実体であり，無限の力であり，みずからすべての自然的生命および精神的生命の無限の素材であり，この内容を表現する無限の形式であるということである．…世界史において事態が理性的にすすんだこと，世界史が世界精神の理性的かつ必然的な経過であったことは，世界史自体を考察することによって初めて明らかにされなければならない．その世界精神の本質は確かにつねに同一であるが，その精神は世界の存在においてその本性の一端を説明する[63]．

ここには，歴史を理念的に構成するという，哲学者ヘーゲルの立場が明確に現われている．ランケがこうしたヘーゲルの哲学的方法に違和感を抱き，ニーブーアにその模範を見る「古事学的」方法に共感を抱いていることが明らかになるのである．

しかもこうした見解を講義で語ったのが，1839 年の晩秋だったことにも注目しなければならない．

---

61) Ranke, *Vorlesungseinleitungen*, S.134 f.

62) G.W.F.Hegel, *Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte*, Der Text folgt der Ausgabe von F.Brunstäd（Reclam Universal-Bibliothek），Stuttgart 1961，グロックナー版からの邦訳も引用箇所に関しては同じテクストであるように思われるので，併記する．ヘーゲル『歴史哲学講義』（上）長谷川宏訳，岩波文庫，2004 年，22 頁，参照．

63) Hegel, a.a.O., S.48-50.『歴史哲学講義』，23 － 26 頁，参照．ヘーゲルは本書で，ニーブーアの『ローマ史』にも言及している．「ニーブーアはローマ史の考察に先立ってイタリアの諸民族についてきわめて学問的な論述をおこなっている．しかしそこからローマ史とのつながりが見てとれない．一般にニーブーアの歴史はローマ史の批判として考察されなければならない．なぜなら，ニーブーアの『ローマ史』は歴史のまとまりをまったくもたない一連の論述からなっているからである」（Hegel, a.a.O., S.392. 邦訳，（下），100 頁，参照）．具体的なテーマとしてはニーブーアの「農地法」の把握の批判もなされている（A.a.O., S.419 f. 同，135 － 6 頁，参照）．

この年にランケは彼の主著の一つである『宗教改革時代のドイツ史』の第1巻を刊行した[64]．この大著は帝国議会議事録をはじめ多数の原史料を駆使した緻密な歴史研究である．一方ヘーゲルはこの歴史哲学講義において宗教改革にも1章をもうけて論じている．ヘーゲルにとって，宗教改革は「中世末のあの朝焼けにつづく，すべてを照らしだす太陽[65]」であった．そして語る．

> 宗教改革は教会の堕落から生じてきた．教会の堕落は偶然のものではなく，権力や支配のたんなる乱用ではない．…教会の堕落は教会自身から生じた．堕落の根源は，この堕落が感覚的なものとして教会のなかにあり，外面的なものがそのようなものとして教会自体の内部に存在することにある．（外面的なものを芸術で輝かすことでは不十分である）．より高次のものである世界精神は精神的なものを教会からすでに排除した．教会はこのことにも，また世界精神とのかかわりにも関与しない．こうして教会は教会の堕落を保持するのである．それは感覚的な主観性であり，教会によって精神的な主観性に美化されていない直接の主観性である．これ以後，教会は世界精神の背後に後退する[66]．

さらに宗教改革の本質的内容について語る．

> ここに新しい最後の軍旗がかかげられており，そのまわりに諸民族が集まる．それは自由な精神の旗であり，その精神は自足し，しかも真理のうちにあり，いや，真理のうちにあることにおいてこそ自足しているのである．これはわれわれが献身し担う旗である．そのときから今日までの時代は，この原理を世界にうちたてる以外の働きをしなかった．宥和自体と真理をその形態によって客観的にすることによって．教養には一般に形態が密接に結ばれている．教養は普遍的なものの形態の活動であり，これは思考一般である．法，財産，道徳，政府，国制などはいまや普遍的なやり方で定められ，それによって自由意志の概念にふさわしく理性的でなければならない．そのようにしてだけ，真理の精神が主観的意志をもって意志の特別な活動のなかで生じてくる．主観的で自由な精神の強さが普遍性の形態へ決断することによって，客観的な精神が生じうるのである．この意味で，国家は宗教に基づいているととらえなければならない．国家と法は，宗教が現実の状況に現われたものにほかならない．これが宗教改革の本質的な内容である．人間はみずから自由であろうとするように定められているのである[67]．

---

64) Ranke, *Deutsche Geschichte im Zeitalter der Reformation*, Bd.1. Berlin 1839. 本書は全6巻（1839 − 1847），3261頁に及ぶ歴史学の立場による宗教改革研究の最初の本格的書物となった．その一部が邦訳されている（ランケ『宗教改革時代のドイツ史』I, II, 渡辺茂訳，中公クラシックス，2015年）．

65) Hegel, a.a.O., S.553. ヘーゲル，前掲書（下），308頁，参照．

66) A.a.O., S553 f. ヘーゲル，前掲書，309頁，参照．

67) A.a.O., S.559. ヘーゲル，前掲書，315 − 316頁，参照．

ヘーゲルの才気煥発な精神を感じさせるものとはいえ，自由の理念の発展における宗教改革の位置についてのこうした見解には，抽象性が見られ，史料を批判的に吟味しながら丹念に歴史考察を進めるランケにとっては賛同しがたいものが感じ取られたであろう．ニーブーアの批判的方法への敬意はここでもはっきり表れているのである．

しかしここで注目したいのは，ランケがそれにもかかわらず，哲学的方法が示している全体への関連を志向する姿勢に，一つの重要な面を見ていたことである．同じく 1839 ／ 40 年の冬学期の講義でランケはさらに語る．

> 二つの方法がたがいにまったく相容れないことをわれわれは気づいている．一方は事実を前提とし，他方はまさに事実を目指している．一方は研究においてある特定の部分に容易に惹きつけられ，他方はつねに全体を念頭においている．二つの方法をわれわれはその退化形態においてではなく，その理想形態において考察する．それゆえどちらもわれわれを満足させることはない．古事学的方法はそれが普遍史的見解にいたり得ないからとはいえ，今に至るまでなされてきた限りにおいてそれなりに申し分ない．それはホメロスにおいて述べられているような見解である．すなわちそうした見解に至る日はいつか来るであろう，等々である．それゆえそこには全体への統合，つまり全体性の展望が欠けているのである．これにたいして哲学的方法は，しばしば確固たる根拠にほとんど基づいていない．なぜなら前提とされる事実がつねに確定しているわけではないからである．つまり，確証の前提条件によって，普遍的に妥当するわけではない哲学体系によってその方法は制約されるからである[68]．

1840 年代の講義の学生による筆記ノートにもニーブーアにふれた同様の一節があることをドーヴェが伝えている[69]．それによればランケはまず初めに古事学的方法とも名づける歴史的個別研究の方法を，全体を関連づける哲学的方法に対比させ，前者の模範としてニーブーアを称賛する．一方，ランケは今や後者の代表者としてまず第一にヘーゲルに反対している．ニーブーアについてはランケは批判的研究の豊かな貢献とその一部をなす学問的長所を称讃するばかりではない．さらにそれをこえて，事実を精神的にふかく理解し，個々の現象をいずれも道徳的に吟味するという実り豊かな努力をたかく評価する．それにもかかわらず彼は，ニーブーアが全体の関連を絶えず顧慮しているわけではないことに気づくのである．すなわち特殊なものの背後で普遍的なものが姿を消してしまうのである．諸民族の生活の個々

---

68) Ranke, *Vorlesungseinleitungen*, S.134 f. これは 1839 年冬学期に受講した法学の学生ゼーゲサー（Philipp Anton von Segesser（1817-1888）の筆記録によるものである．ゼーゲサーについては，Gunter Berg, *Leopold von Ranke als akademischer Lehrer*, Göttingen 1968, S.238.

69) これはランケがバイエルン王マクシミリアン 2 世にたいして行ったベルヒテスガーデン講義録（1854）へのドーヴェの序言に紹介されている．Dove, Vorwort, in: Ranke, *Über die Epochen der neueren Geschichte. Vorträge dem König Maximilian II. von Bayern gehalten*,（*Weltgeschichte*, Teil 9, Abt.2.），Leipzig 1888, S.XI-XIII. ランケ『世界史概観』鈴木成高・相原信作訳，岩波文庫，1966 年，14 － 16 頁，参照．なお細かいことであるが，訳文に「40 代」とあるのは 18「40 年代」であろう．

の要因を次々に扱っていくことによって，人間の事柄の移ろいやすさが観察者に深く印象づけられるのである．さて，まさにこの欠陥を，細部の代わりに体系をおこうとするヘーゲルの歴史哲学は，その壮大な，それどころか巨大な企てによって除き去るように思われる．しかしながらそのやり方は，しばしば恣意的で強引である．その成果は研究が出来事を詳しく検討するとたちまち動揺してしまう．またヘーゲルの歴史哲学は重要ではあるが，決して普遍妥当的ではない哲学の考えに基づいているので，そこから得られた見解もまた制約されたものとなる．その歴史哲学はとくにその汎神論的性格によって個別的存在の意義と相容れない．卓越した歴史家や政治家で歴史をそのような観点から捉えたものはおそらく一人もいなかったであろう．これに反して，その志向において哲学的方法には真実なものがある．この方法は正当な理由に，つまり普遍的見方を求める要求に基づいている．

しかし，純粋に歴史的方法によってもこの普遍史的見方に一層確実に到達可能であるべきではないだろうか．ニーブーアが取った方法とヘーゲルの念頭にあった志向とによってだけ，普遍史的目的が達成されるのではないだろうか．かぎりない愛情をもってひとは個別研究に取り組まねばならず，個性的なものを道徳的規範に従って吟味しなければならない．その際しかしながらつねに歴史の経過を全体として把握することに努めなければならない．歴史研究の分野は，結局のところ精神的存在の分野であり，その存在は絶えず前進しつつある．むろんこの前進は論理的カテゴリーの法則に依拠するのではなく，歴史的現象はつねにその固有の精神的内容をもっているのである．その結果，明らかになるのは無条件の必然性ではなく，緻密で内的な因果関連である．ここには形象の最大の自由と多様性がゆきわたっている．しかし他面において，驚くほど一貫した普遍的関連もゆきわたっている．ところでこうした普遍的関連は認識され得るであろうか．もちろんである．客観的で普遍的な発展が存在するならば，それは単純で良心的な，全体にたいしてと同時に個別的なものすべてにたいして注意を怠らない観察にとっても明らかになるであろう．

このようにドーヴェは，1840 年代の学生の受講ノートからランケが捉えているニーブーア史学のもうひとつの側面を指摘している．批判的歴史研究が詳細に及ぶこと，それ自体は必然的なことであり，推し進められるべきことである．しかし同時に広い展望を見失ってはならないという指摘は注目すべき点であろう．

ここでニーブーアとヘーゲルとの対比において示されていることは，ランケの 1830 年代の講義においてもすでに明確に表現されていた．同じくドーヴェが、ランケの自筆原稿を紹介している．

> 人生の事柄を知るためにはまさに二つの道があるのである．すなわち個別の認識の道と抽象の道である．一方は哲学の道であり，他方は歴史の道である．その他の道は存在しない．…したがってこれら二つの認識源泉は区別されなければならないだろう．だがしかし，歴史の全体を単に事実の厖大な集合体とみなし，それを記憶にとどめさえすればそれでよしとする歴史家も間違っている．個別と個別とをばらばらにつなぎ合わせ，もっぱらある種の普遍道徳によってそれを固く結び合わせることは，このような間違いから生じてくるのである．私の見解はむしろこうだ．本来の歴史学

は，個別の研究と考察から出発し，歴史学固有の方法によって，もろもろの出来事の普遍的見解，ならびに客観的に存在する相互関連の認識にまで高められる適性と能力とをみずから具えているのである．

真の歴史家となるためには，私の考えるところによれば，二つの資格が必要である．第一には個別自体にたいする興味と喜びとを抱くということである．…しかし事は決してそれだけで終わらない．歴史家はまた普遍に向かって目を見開いていなければならない．しかも彼はその普遍を，哲学者のようにあらかじめ考案するのではなく，個別を考察しているうちに，世界の一般的発展が歩んだ経過が歴史家に明らかになるであろう[70]．

こうした主張は，1860 年代のランケの自筆原稿にも貫かれている．

普遍史は人類の過去の生活を把握する．しかもそれを個々の関係や個々の方向においてではなく，その充溢と全体性においてとらえるものである．普遍史学は個別の究明にあたりながら，しかしつねにみずから携わる大いなる全体を見失わないという点において個別研究と区別されるのである．

個別の研究は，どんな些細なことであっても，それがあげた成果はそれ自身価値をもつものである．こと人生に向けられているかぎり，それはつねに無条件に知るに値するものを明るみにだすのである．いかなる些事にわたるものといえども，それは示唆を与えるものである．なぜなら人間にかかわるものはつねに知るに値するからである．しかし個別研究といえども，つねに一つのより大きな関連につながるであろう．…根本的に研究され正確に認識された事柄を叙述すべきである限り，今日の研究の進展を保持しなければならないとはいえ，誰もが認識することを求めている普遍的なものを見失うおそれがあるのだ．…批判，客観的把握，包括的綜合は協調しうるし，また協調しなければならないということに，われわれは同意している．普遍に関係づけるということは，少しも研究を阻害するものではない．普遍的なものなくしては研究は無味乾燥なものとなるであろうし，また研究なしには把握は妄想に堕してしまうであろう[71]．

こうして，ニーブーアの批判的研究を高く評価するランケであるが，同時にそうした個別研究が普遍に目を閉ざすことになりうることにも警告をしていることがここに読み取れるのである．

V　ランケの「ローマ史講義」におけるニーブーア

さて，ランケは 40 年余に及ぶベルリン大学における講義において，2 回ローマ史に絞った講義をおこなっている．もちろん「世界史概観」や「古代世界の歴史」と題する講義においてもローマ史が論じ

70)　Dove, a.a.O., S.IX f. からの引用．『世界史概観』11 － 12 頁，参照．
71)　Dove, a.a.O., S.XV f. からの引用．『世界史概観』17 － 19 頁，参照．

られているのは確実であるが，「ローマ史」と題する講義は，1848／49年の冬学期と，1852年の夏学期になされたものだけである[72]．とくに後者では，より詳しくニーブーアの研究者としての歩み，時代との関連，そのローマ史研究が述べられている．

1848年の講義の序論でランケは，「世界史を知り理解することは人間精神の最大の課題のひとつである」とし，一般史の重要な分野の一つはローマ史であるという[73]．そして諸学問が復興して以来ローマ史と取り組んだ卓越した人々を挙げる．イタリア人のマキアヴェッリ，フランス人のモンテスキュー，イギリス人のギボン，ドイツ人では1831年に亡くなったニーブーアである．これらの人々は彼らが見出した先行研究，彼らの論述方法，観点や成果によって異なっている[74]．

これらの4人の歴史家，とくにニーブーアについて，1852年の「ローマ史講義」ではかなり詳しく論じられている．まずニーブーアの学識について述べられる．

> ニーブーアは政治的関心とこの上ない学識および類いまれな研究の才能とを結びつけたことによって他と区別される．ニーブーアは天性の学者であった．本物の知識欲の持ち主，きわめて広い読書の人，事柄を明瞭に想いうかべ，一つのことを他のことによって解明しようとする要求に由来する著しく多様なものを結びつける生まれつきの天分の持ち主であった．並外れた記憶力，理解しようとする本能的な欲求，批判的な能力，政治的な意欲が彼のなかでごく稀な仕方で一つに結びついたのである[75]．

ニーブーアはすでに早くから古代史に没頭し，とりわけ古典古代に熱烈な愛情をいだいていた．

> しかし彼はきわめて活発に時代の出来事にも関心を寄せた．彼の故郷ホルシュタインの地所の状態――そこでかつての農奴は，彼らが解放された場合にはより粗悪な農場に移され，同様のことがその後かつての自由農民に関しても試みられた――は彼の義憤を呼び起こした．そして彼は厄介な土地所有の問題を考察し始めた．彼はプロイセンの国務に就いた．プロイセンでは1807年，1808年の偉大な自由主義的な措置が実施され，地所の実情，地主と農民との関係が広く注目された．
>
> しかし，今を生きると同時に古代に生きていた政治家にとって，まなざしを古代に向けながら，とりわけ類似の状況の研究に取り組んでいったことは，きわめて当然のことであろう．いずれにせよ時代の激動は，革命において生じたことすべてを通じて古代の農地法を思い起こさせた．平穏な状況では不可能であったことを，時代の変動が納得のいくものにした[76]．

72) Verzeichnis der Rankes Vorlesungen, in: Ranke, *Vorlesungseinleitungen*, S.29-32.
73) *Vorlesungseinleitungen*, S.211.
74) A.a.O., S.211 f.
75) A.a.O., S.227.
76) A.a.O., S.228.

少年期を過ごしたディトマルシェンでの農民の現状の観察, デンマークでの国家公務員としての勤務, シュタインのもとでのプロイセン改革への参与といった実務経験のなかでニーブーアに芽生えた土地所有問題の重要性が，古代ローマ共和政の研究へと結びついていくことにランケは注意を促しているのである.「農地法」の研究が，ニーブーアのテーマとなった.

> 諸学問の順調な進展を妨げるように見える大きな動揺には，しばしばそれらがふたたび過去にたいする別の関心を呼び起こすよきものがある．こうしてニーブーアは最初の自主的な研究テーマを農地法と定めた．フランスで国民財産の売却によって農地法が想起されたヨーロッパの革命が進展するなかで，またとくに新しい農耕立法が定められたプロイセン行政のもとで，農地法をニーブーアは，アッピアノスやプルタルコスを読んでいたとはいえ，まだ充分に理解してはいなかった.
>
> しかしニーブーアはそこに立ちどまらなかった. くりかえしその問いを追い求めながら, ニーブーアは議論の余地のあるローマ国家の起源に立ち帰った．彼は非常に広範な研究に取りかからねばならなかった．その際に，長い停滞ののち今まさに興隆する歴史法学，生き生きと目覚めた古代学，とりわけドイツ文献学の批判的傾向が彼に役立った．まったく異なった素材，まったく別の解明がそこに存在した[77].

ニーブーアのローマ史研究の背景には、ナポレオン支配下のドイツの現状があったことをランケは指摘する.

> われわれはさらに，精神の一般的な動きに関連した一要素を付け加えよう．ナポレオンの重圧を受けて，国民性の権利に対する感情が目覚めた．現象，出来事，国家形成を，国民性の無意識の活動に帰することがふたたび始まった．国民的な詩，風習，生活様式の遺物がすべてが収集された．このことは今やニーブーアの研究にも生き生きとした影響を及ぼした．彼は古代ローマ史は詩歌から生じたという考えを述べ，詳細に根拠づけたことによって――そのさい彼はおそらくそのように考えた最初の人ではないことを自覚していた――ドイツの教養ある読者の賛同を期待することができた．彼らは自国の遺物の批判によって同様の理念を準備していた．しかし同じ要素が，決してすべてを排除するのではなく，国民的なもの，真正なものを承認するように彼を導いた．彼の努力はすべて，国民的なものや真正なものを伝説から区別することであり，関連する全体に結びつけることであった[78].

ランケはニーブーアの没後に受講者のノートから編集された『ローマ史講義録』(3 巻，1846 －

77) A.a.O., S228 f.
78) A.a.O., S.229.

48）[79] にも注意を促し，さらに『ローマ史』および、その第 2 部，第 2 版の意義を強調する．

とりわけ注目に値するのは，ニーブーアの講義である．それらはローマ史全体を詳しく論じており，それらについては筆記ノートに基づいて一般に信頼すべきものが伝えられている[80]．さまざまな箇所でとくに際立っているのは，講義をしている人物，すなわちニーブーア自身である．そこから彼の精神を推測し得るであろうし，彼の精神的な透徹力と彼の道徳について思い浮かべることができるであろう．客観的要素に，しばしばくっきりと，ときには一面的にすら現われでる主観的要素が付け加わっている．人生のさまざまな経験，時代の出来事の生き生きとした把握から，彼に国家や戦争，法や国制に関する全体的展望が形成された．それは講義で，つねに明瞭になっている．さてニーブーアが学識の面でマキアヴェッリやモンテスキューを凌駕しているとはいえ，彼の場合にも彼の著作に生命を与えるものは時代における立場やそこから生じる世界観である．学識は時おり予見になるが，しかしそれは現代の印象に基づく見解によって活気づけられる．すべての上に，ナポレオン時代やナポレオンへの抵抗の内的諸要因にたいする記憶が余韻を残している．その限りでニーブーアの著作はナポレオン精神に反対する革命の一つである．つまりこの著作はナポレオン精神の世界支配に反対して企てられた戦いを意図して執筆されている．

こういう訳でここに示すこの書物[81]は，ドイツの学問，ドイツ精神にふさわしい産物である．彼の書物は，当地（ベルリン）の大学の講義から生まれた．すなわち 1811 年と 1812 年に出版され，15 年後，第 2 版でまったく書き直された．本書の第 2 部の第 2 版（1830 年）はニーブーアの精神のもっとも成熟した成果といわねばならない．そこでは確証を得ようとする試みが，神話や作り話によってとりまかれた時代を考察するただなかで，力をふりしぼってなされる．第 3 巻はまだ出版のために練り上げられておらず，最終的な推敲がなされていない[82]．

Ⅵ　おわりに

近代歴史学の基礎を築いたとされるランケが，ライプツィヒの学生時代に専攻したのは歴史学ではなかったということは注目してよい事実である．彼は当初，むしろ歴史学を敬遠し，専門としたのは神学と古典文献学であった．その彼が歴史家となる決断をしたのは，フランクフルト・アン・デア・オーダーのギムナジウムで講義をおこなうようになってからである．古典語と並んで，歴史学の授業も担当し，

79）Niebuhr, *Vorträge über die römische Geschichte*, 3 Bde, Berlin 1846-48. Vgl. *Vorlesungseinleitungen*, S.230 Anm.

80）ランケが「ローマ史全体を詳しく論じており」とし，「（受講者の）筆記ノートに基づいて」と述べていることから，ここで念頭にあるのは，第一次ポエニ戦争までを考察している『ローマ史』ではなく，ボンでの『ローマ史講義録』であろう．

81）文脈上，ここで突然「この書物は」とあるのは，やや唐突に感じられるが，直後に出てくる「彼の書物は」とも関連し，明らかに『ローマ史』を指すであろう．

82）*Vorlesungseinleitungen*, S.229 f.

その準備のためにギリシア，ローマの歴史家たちの原典を組織的に精読したことが歴史家への道を選び取らせることになった．しかし，歴史への関心に豊かな刺激を受けるきっかけとなったのは，すでに学生時代にニーブーアの『ローマ史』（1811，1812）を読んだことであった．この歴史書は，ランケの歴史研究にもっとも大きな影響を及ぼすことになったのである．しかも古代ローマの共和政前期の批判的研究にランケは深い感銘を受けたのであった．過去の伝承をそのまま鵜呑みにすることは退けられる．史料の批判によって歴史の真実を探求する精神に深く動かされたのである．

ヨーロッパの近代歴史学が成立する重要な基礎は，史料の大規模な収集と史料の批判的吟味の深化である[83]．自然科学の学問的基礎が実験による検証であるとするなら，歴史学はこの史料批判によってその学問性が確保されることになる．ランケはニーブーアの『ローマ史』を通じてその批判精神に触れたのである．そして彼の最初の書物『ロマン・ゲルマン民族の歴史』とその付録『近世歴史家批判』において，ニーブーアが古代ローマの共和政に適用した批判的方法を，近世初頭の時期に適用したのである．それまで権威とされていたグィッチアルディーニ（Francesco Guicciardini 1483-1540）の史書も批判的精神の不十分さを指摘されたのである．この意味でランケを「近代歴史学の父」という場合にも，ランケが初めて批判的歴史的方法を確立したということではないということは，あらためて確認しておかなければならない．そしてランケが最初の学問的成果をニーブーアに献呈したことによって，両者の交流が始まったのである．

その後，南方研究旅行のあいだヴェネツィアやローマから，ランケがニーブーアに宛てた書簡には，原史料の探索と収集をめぐる興味深い記述が見られた．そこには，近代歴史学草創期に歴史家たちの原史料を求める姿が鮮やかに示されている．ランケ自身にとっても，最初の書物の完成以降は，ベルリンの王立図書館をはじめ，ヴィーンやイタリア諸都市の文書館，図書館に所蔵されているヴェネツィア公使の報告書など原史料の利用が欠かせない課題となっていたのである．

一方ランケはこうして深められる歴史研究が，個別に沈潜するあまり，広い展望を見失う危険をニーブーアに即して見ていた．ニーブーアの批判的歴史学に心酔し，理念的に歴史を構想し個別の豊かさを見失う傾向のあるヘーゲルに反発するランケであっただけに，このことは顧慮すべきところであろう．

さらに示唆的なことは，ニーブーアの歴史研究が，フランス革命および，ナポレオン戦争のなかでの国民意識が高揚するなかで進められたことである．このことをランケはニーブーアの学問的足跡を辿るなかで確認し，ニーブーアの歴史研究が反ナポレオン的精神に担われていると見るのである．南方研究旅行後，数年にわたって編纂し、みずから多くの論稿を発表した『歴史政治雑誌』において、ランケはドイツの国家としての個性を重視しフランスの政治体制をそのまま移植することに警鐘を鳴らした[84]．この点でもランケの立場はニーブーアと重なり合う点をもつのである．「個性」の重視は近代歴史学の

83)　近代歴史学成立のもう二つの柱として，伝統的な救済史的歴史観と歴史学の区別，およびマイネッケの言う「個性」と「発展」に関する新しい歴史的感覚を挙げることができるであろう．前者に関しては，佐藤真一「ランケにおける対立と融和――近代歴史学とウルトラモンタニスムス－－」（森原隆編『ヨーロッパの政治文化史・統合・分裂・戦争』成文堂，2018 年，所収，111 － 129 頁）で考察されている．

84)　佐藤真一「ランケとフランス七月革命」，『国立音楽大学研究紀要』第 45 集，2011 年，所収，1 － 11 ページ，参照．

特徴の一つであった.

ランケとニーブーアとの学問的交流の中に、われわれは近代歴史学形成期の生きた舞台を見ることができるのではないだろうか[85].

85) ローマ史の個別的な問題に関しては，テオドア・モムゼンの精力的で壮大な研究がランケにとって比重を増してくる．晩年の大著『世界史』（*Weltgeschichte*）の1巻1部，2巻2部，3巻1部・2部，4巻1部・2部，6巻1部，参照.